
DOG DAYS **もう一つの世界**

REMON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOG DAYS もう一つの世界

【Nコード】

N0721BA

【作者名】

REMON

【あらすじ】

勇者としてフロニヤルドに召還された『シンク・イズミ』その勇者召還に巻き込まれた少年『神崎 優人』
この物語はそんな誤召還された彼の話。

プロローグ

桜も咲き始め、天候は快晴、ポカポカと暖かい春の朝。

「……優………！」

「……優……人………！」

「優人！」

「あ？ どしたシンク？」

……寝てたみたいだな俺。ここの校長の話は長すぎるんだよ。困ったもんだ。

これだから終業式とかの類いは苦手なんだ。

「早く行こう。飛行機の時間に遅れる」

「りょーかい……ふああ……ねむ」

「そんなに眠たいなら飛行機の中で寝なよ」

「そうする………」

俺達は今日、飛行機でイギリスに行くので終業式を早退することになった。

俺とシンクが走って教室に荷物を取りに行く途中……

「ん？ イズミ、神崎、どうした？ 早退か？」

廊下ですれ違った先生に声をかけられた。

「すみません。飛行機の間がありました」

走りながらシンクが答える。

「そうか。気をつけてな」

「はい」

俺がスポーツバッグをとってシンクに声をかけようとすると、シンクが窓を開けて外に出ようとしていた。

「おいシンク、なんで窓から出るんだよ」

「こっちのほうに近いからね。優人も早く来なよ」

教室の鍵と窓の鍵はどうするんだと思ったが、細かいことは気にしないことにした。

「わかった。すぐに行く」

窓を出て細い道を横に行き下に進むと、ちょうど校門を上から見下ろせる場所に来た。

「シンク、俺が先に行くよ」

いつものように跳び、着地した。

あっ、スポーツバッグ置いたままだ。

「シンク。悪いけど俺の荷物も一緒に持ってきてくれないか？」

「オッケー」

シンクはそう言うと、二つのバッグを上空に投げ、跳んだ。

すると、突然短剣のような物をくわえた犬が、シンクの着地地点の近くに走ってきた。

「そこの犬、さっさと離れろ」

しつしと手で追い払おうとするが、無視。

犬はくわえていた短剣を地面にさした。

次の瞬間——マンガやアニメにでてきそうなピンク色の魔法陣のようなものが出てきた。

「ちよっ！ うあ！」

俺は突然出てきた魔法陣の中に落ちた。

わけがわからない！ 落ちてる！ 何で！ さっきまで地面だったのに！

「ええ！ 何これえ！ えー！！」

上の方からシンクの声が聞こえる。

これがすべての始まり。

この先の世界で起こる出来事が俺の人生を大きく変えるきっかけになることを俺はまだ知らない。

ブログ（後書き）

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

初めての戦闘（前書き）

初心者ですが精一杯頑張ります。
駄文ですが、見てくれると嬉しいです。

初めての戦闘

「うおおー!!! なんて空にいるんだよおおー!!!」

おかしな空間をぬけると俺は――はるか上空にいた。

「落ちるうー!」

森に突っ込んでいく。

地面まであと数メートル。もうダメだ……! そう思ったとき――俺の体は数秒間、空中で止まった。

そしてゆっくりと地上に降りていった。

何だったんだ? 今のは……?

……あの犬が出した魔法陣みたいなやつ……あの時と同じだ……。

ほかの人に話しても信じてもらえないだろうと思って隠していたが、俺はさっきの魔法陣を知っている……。

色は違うがあのときとほとんど同じだ。

「そつだ! シンクは!?!」

周りを見回したが、シンクの姿はなかった。周りには、たくさんの木や草が多い茂っている。

近くに生えている見慣れない植物に目を向ける。

あんな植物見たことないぞ。こんなところ紀乃川市には無かったよな……。

とりあえずこの森を出るか。

近くにあった俺のスポーツバッグを見つけて立ち上がった。

「ん?」

スポーツバッグの横に何か落ちている。

近づいてよく見るとそれは、刀のようなものだった。

「これは……刀か……？」

落ちている刀を拾い、鞘から抜く。

綺麗な刀だな……

刃は白銀に輝いていて、棟は漆黒に染まっている。

——ガサガサッ

近くの草むらが音を立てた。

「？」

音がする方に振り向いた瞬間、何かが飛び出してきた。

その何かは突然、俺の腹部に体当たりしてきた。

「ぐはあっ！」

激痛が走る。

俺は吹っ飛ばされ、後ろの木に叩きつけられた。

意識が一瞬飛ぶ。

だが俺はなんとか気絶せずに済んだ。

意識が朦朧とする中、俺は体当たりしてきた何かに目を向ける。

「……狐！？ 犬！？」

俺に体当たりしてきたのは、狐か犬かよくわからない獣だった。

獣は荒々しい息をたてながらこつちを睨んでいて、今にも飛び掛つて来そうな感じだった。

このまま逃げたとしても、どこまでも追いかけてきそうだな……。右手に握られている刀に視線を落とす。

……これならなんとかなるかもしれない。

俺はよろよろと立ち上がり、刀を両手で持ち、構える。

俺が刀を構えた瞬間、獣は襲い掛かってきた。

グツと柄に力を込めると――手の甲の上に空色の紋章が現れた。

「なっ！」

足元にも空色の紋章が現れた。紋章の中央には、交差した剣が描かれている。

「なんだよ……これ……」

刀身の周りを空色の光が覆った。

獣は突然出てきた紋章に驚いたのかその場で固まっている。

――今だ！

俺は地面を力強く蹴り、走った。

「早っ！」

何故か俺は一瞬で獣の前に移動した。

そして、斬った――獣の首を。

獣の首は宙を舞いながら地面に落ちた。

獣の死体など見たくなかったので、目を逸らそうとするとその獣は、砂のように細くなりどこかへ消えてしまった。

「っ……！」

俺は目の前で起きた信じられない出来事の数々に呆然としていた。
……よくわからないけど、とりあえず助かったみたいだな。

まさか親父に刀の扱い方を教わったのがこんなところで役に立つとは……。

アイツが行方不明になって、親父と母さんが海外に仕事に行ってからは、あまり刀に触ってなかったのによく使えたな、俺。
やっぱり体が覚えてるのかな？

「いや〜お見事でござった」

背後から声が聞こえてきたので、警戒し刀を構える。
そこには、長身で茶色の髪的女性が立っていた。

「だれだ……ていうか何で狸耳と狸尻尾！？」

刀を向けられているのにもかかわらずその女性はいっさい動じていない。

「そんなに警戒しなくてもいいでござるよ。拙者はただその刀を取りにきただけでござる」

俺が握っている刀に人差し指を指す女性。

「えっ？ この刀あなたのだったんですか？」

「じつは、この辺りで休息をとっていたときに、すっかり置き忘れてしまっただけなのでござるよ」

うつかりで刀を忘れたりするなよ……でもそのおかげで俺は助かったわけだが……。

「危なくなったら助けにいかうと思っていたでござるが、拙者が手を出すまでもなかったでござるな」

十分危なかったと思うんですけど!?

「そういえば、自己紹介がまだだったでござるな。拙者は、ブリオツシュ・ダルキアン。」

ビスコッティ騎士団、自由騎士、オンミツ部隊頭領でござる」

ビスコッティ？ 騎士？ オンミツ部隊頭領？ 聞き慣れないワードに戸惑いながらも、俺は自己紹介した。

「俺は『神崎 優人』です」

刀を鞘に収め、ブリオツシュさんに刀を返す。

「お館さま」

女性らしき声がした。

声がした方に目を向けると草むらの中から、金髪でスタイルのいい狐耳と狐尻尾を持つ女の子が出てきた。狸耳の次は狐耳かよ。

「お館さま、早くしないと戦が終わってしまうでござるよ」

「ユキカゼか、すまないすぐ行くでござるよ」

「あれ？ そちらの方はお館さまのお知り合いですか？」

「拙者もさつき会ったばかりでござる。ユキカゼ自己紹介してくれ」

「了解です。お館さま」

ユキカゼと呼ばれた金髪の女の子は自己紹介してきた。

「拙者は、ユキカゼ・パネトーネ。ビスコッティ騎士団、自由騎士、オンミツ部隊筆頭にござる」

「俺は、神崎優人です」

「優人殿は何故、このようなフロニヤ力の弱い森に武器も持たずに入ったのでござるか？」

自己紹介を終えた俺にブリオツシュさんが尋ねてきた。
フロニヤ力……？

「話すと少し長いんですけど……」

俺は魔法陣に入ってこの世界に来たこと、シンクを探していることを話した。

「優人殿は異世界人でござったか……では順番に説明するでござる」
ブリオツシュさんの話をまとめるところだ。

あの魔法陣は、『勇者召喚』という異世界から勇者を召喚する儀式で、国の領主がその儀式を行うことができる。

異世界から召喚された者は、召還台というところに来るのだが俺はこんなところに召還された。それはブリオッシュさんとユキカゼさんにもわからないらしい。

その儀式でやってきた者は、元の世界に帰ることはできない。だから勇者召還は滅多に行われなければならない。だが、遠方の異国においては帰ることができたという話もあるとか。

帰る方法については、ビスコッティ国立研究学院に頼んで探してもらうことになった。

シンクは今ビスコッティ共和国という国の勇者として『戦』に参加している。

この世界での戦は、殺し合いの戦争ではなくスポーツ競技会的なイベント。『戦興業』として国が開催している。

俺を襲ったあの獣は、『魔物』というもので、魔物にはいくつか種類があり、俺を襲った獣のようなものもいれば、土地神という生物が魔物になることもあるらしい。

信じられないことばかりだが、実際に起こっていることばかりなのだから信じるしかない……。

魔物に勇者それに魔法みたいな術……まるでベッキーの好きなファンタジー小説の世界だな。

「拙者とユキカゼはこれから戦を見にいくが、優人殿も一緒にどうでござるか？」

「いいんですか!？」

「もちろんでござるよ」

この世界の戦には少し興味がある。ぜひ一度見てみたい。

ブリオツシュさんは、右手で指笛を吹いた。

すると草むらから、黄色の怪鳥と紫色の怪鳥が飛び出してきた。紫色の怪鳥は、隣の黄色の怪鳥より大きい。紫色の怪鳥の背中には、赤いスカーフを巻いた白い犬が乗っている。

「えーと……この鳥と犬はいつたい……」

「この鳥はセルクルといってフロニヤルドでは、移動するときなどに使われているでござる」

「こっちは拙者らと同じオンミツ部隊の『ホムラ』でござる」

ユキカゼさんが黄色のセルクルに飛び乗りながら言う。
ブリオツシュさんも、紫色のセルクルに飛び乗った。

「優人殿は、拙者の後ろに乗るでござる」

ユキカゼさんの後ろに乗る。

「しっかり掴まっているでござるよー」

ユキカゼさんがそう言うのと、二匹のセルクルは前へと進みだした。

「言い忘れていたでござるが『さん』は不要でござる。あと話すときはふつうでかまわないでござるよ」

「なら俺のことも『優人』って呼んでくれないか？」

「心得たでござる」

ユキカゼはニコリと笑った。
うん可愛い。

「ユキカゼ、ちょっといいか？」

「どうかしたでござるか？」

「ちょっと速くないか！？」

「そつでござるか？」

ユキカゼは平然とした顔で答える。

「すぐに慣れるでござるよ」

慣れるって……。

ていうか二人も乗せてるのにけっこう早いなこの鳥。

森をぬけると放送のようなものが聞こえてきた。

『——勇者降臨——!!』

「勇者？ シンクか？」

「優人、あそこあそこ」

ユキカゼが空を向いている。

俺も空を見上げると、そこには四角いモニターのようなものが浮かんでいて、シンクが次々と兵士を棒で倒しているところが映し出されていた。

「勇者殿は珍しい物を武器にしてるでござるな」

ブリオツシュさんは興味津々にモニターを見ている。

「シンクに棒を使わせたら、その辺のやつじゃまったく相手にならないと思いますよ」

「それなら今度、手合わせしてみたいでござるな」

「もう少しでよく見える場所に着くでござるよ」

ユキカゼはそう言つと速度を上げた。

「到着でござる」

二人はセルクルから飛び降り崖に向かって歩きだした。
俺も飛び降り、二人について行つた。

「いやゝ間に合つてよかったでござる」

「そうですね、お館さま」

二人は横に並んで、少し下を向きながら話している。
俺はブリオツシュさんの隣に立ち、下を見る。
たくさんの兵士が戦っているのが見える。

「優人殿。あそこでござるよ」

ブリオツシュさんが指を指したところに視線を向けると、シンクと緑髪の女の子がいた。

シンク達の前には——兵士の大軍が押し寄せていた。

シンクはオレンジ色の紋章、緑髪の女の子は水色の紋章を背後に出し、シンクは棒、緑髪の女の子は二本の短剣を振り下ろし、兵士の大軍に向けてオレンジと水色の閃光を放った。

——二色の閃光は轟音をたてながら兵士をすべて吹き飛ばした。

「今のはいったい……」

「あれは『紋章砲』といって紋章術の一種でござる」

「紋章砲はフロニヤ力を輝力に変えることで、自分の武器から撃ち放つことができるのでござるよ」

ブリオツシュさんが説明した後にユキカゼが付け加えた。

「なるほど……」

とは言ったものの全然わからん。

でも俺も紋章砲使ってみたいな……練習したらできるようになるかな……。

後で聞いてみるか。

初めての戦闘（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。二度以上行うこともあるかもしれませんが。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待ってます。

閣下VS勇者&親衛隊長（前書き）

お気に入り登録、評価して下さい方、見て下さった方、ありがとうございます！

めちゃくちゃ嬉しいです！

閣下VS勇者&親衛隊長

紋章砲を放ったときに出た煙の中から、一本の矢がシンクめがけて飛んできた。

エクレールは、シンクの前に立ち二本の短剣で防御する。

「くっ……！」

「「うあああ！」」

エクレールは防御しきれず、シンクを巻き込み後ろに吹っ飛ばされた。

「ほんのちびつと期待をして来てはみたが……しょせんは犬姫の手下か」

シンクとエクレールが声のした方を見上げると、そこには白髪で長髪的女性が黒いセルクルに乗っていた。

「レオンミシエリ姫！」

「姫様？ あつちの？」

白髪の女性は人差し指を口に近づけ、

「チツチ……姫などときやすく呼んでもらってはこまるのお」

「我が名は『レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ』ガレット獅子団領国の王にして、百獣王の騎士、閣下と呼ばんか！ この無礼者

が！」

レオンミシェリはそう言って背後に緑色の紋章を出現させた。

『来たー！ 来ました！ レオンミシェリ閣下！ 戦場到着！』

『愛機ドーマも相変わらず凛々しい！』

「グアツガー！」

黒いセルクルが雄たけびをあげる。

「ははは！ それはさて置き、ワシは先に進ませて貰おう」

「ちょ！」

「あっ！」

「勇者！ 邪魔だ！ どけ！」

「いや、そっちこそ！」

シンクとエクレールは同時に立ち上がろうとしたが、うまく立てなかった。

閣下に吹っ飛ばされたときに、シンクの上にエクレールが乗って倒れたためだ。

シンクはエクレールをどかそうと手を伸ばす。その手はエクレールの胸に当たった。

「うえっ」

エクレールは顔を赤らめる。

「え？ あ、ごめん」

シンクはエクレールの胸を何回か揉んだ。

「……女の子？」

「あつ……あ……あ……」

エクレールは相当ショックだったのか、口を大きく開けながら固まっている。

彼女は一度顔を下げた後、涙目で顔を上げて、

「このお……すつとこ勇者がああー！」

シンクはエクレールに空に向かって大きく吹っ飛ばされた。

「うわぁああー！」

『おおつと仲間割れか？ そしてこの勇者、意外とアホか？』

「何やってんだ、あいつは……」

「エクレールは相変わらず元気そうだなによりでござる」

「エクレール？」

「さつきから勇者殿と一緒に戦っていた、女の子のことだござるよ」

ユキカゼがニコニコしながら答えた。

さつきからシンクと一緒にいる緑髪の女の子は、エクレールという名前らしい。

シンクのことだ、どうせエクレールを怒らせるようなことを言ったんだろ。

「さつきのレオンなんたらっていう女の人だれなんですか？ 中継の人が閣下とか言っていましたけど」

「あのお方は、『レオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ』ガレット獅子団領の姫、領主でござる」

大丈夫なのか姫様が戦に出ても……でも戦に出るくらいなんだから強いのかな。

『すごい！ レオ閣下と愛機ドーマ、まさに人機一体の勢いでホルエリアを抜けていきます！』

『そして難関！ すべすべ床のつり橋エリア！ ビスコッティ兵士たちも頑張って迎撃しております！』

『最終防衛線まであと少し、ここが今回の決戦の場か!?!』

「駆け抜けるぞ、ドーマ!」

「グアアッグアー!」

ドーマは地面を蹴り、飛んだ。

「させるかああー!」

シンクとエクレールが、坂を猛スピードで駆け上がり、レオンミシエリに向かって跳ぶ。

レオンミシエリはシンクとエクレールを目の前まで引きつけると、ドーマから跳んだ。

二人はお互いの武器をぶつけてしまい、エクレールの二本の短剣の内一本が欠けてしまった。

レオンミシエリが空中で斧を出して、それを手に持ち紋章砲を放つ。紋章砲はシンクとエクレールに直撃し地面にたたきつける。ドーマは向こう側に着地すると、盾をレオンミシエリに投げ渡した。

「うつ……」

「いたたた……」

「勇者! お前は何なんだ! 戦いの邪魔をしにきたのか!?!」

「そっちこそ! 僕の邪魔を!」

シンクとエクレールが言い争いをしていると、背後から緑色の光が

出てきた。

二人は言い争いをやめ、光に目を向ける。

そこには斧を天に掲げ背後に紋章を出しているレオンミシエリがいた。

「どりゃああ！」

レオンミシエリは斧を地面に叩きつけて足元に紋章を出現させた。

「——獅子王炎陣！」

——地面からレオンミシエリの周りを覆うように無数の火柱が上がり、空からは火の玉が降り注ぐ。

火柱と火の玉は兵士達を次々とけもの玉へと変えていく。
シンクとエクレールは跳躍してなんとか回避した。

「紋章術って……こんな事まで……」

「レオ姫のはケタが違う！ 倒されたくなければ……」

火柱がシンクとエクレールに迫ってくる。

「とにかく逃げる！」

レオンミシエリは再び斧を天に掲げ、

「——大爆破！」

その言葉でシンク達がいたエリアに大爆発が起きた。

『爆破ああ！ レオンミシェリ閣下必殺の『獅子王炎陣大爆破』
範囲内にいるかぎり立っていられる者はいないという超絶威力の紋
章砲！』

「すごい……」

俺はあまりの光景に思わず口に出してしまった。

「シンクとエクレール大丈夫か……？ やられたんじゃ……」

「大丈夫でござるよ」

「え？」

ブリオツシュさんは空を見上げている。

俺も空を見上げたが、そこには何もいなかった………が、よく目
を凝らして見てみると人影のようなものが降ってくる。

——シンクとエクレールだ。

「どうやって……」

「おそらく紋章術を使って空に逃げたのでござるっ」

……紋章術ってそんなこともできるのか。
ますます紋章術を使いたくなってきたな。

「フランボワーズ！ 確認せい！ 勇者とタレミミはちゃんと死んだか？」

レオンミシエリは斧を肩にかけて、放送席に向かって叫ぶ。

『あゝ、はいつ！』

『えーとですねえ……』

「そう簡単に、やられるかああ！」

はるか上空から女性の声がした。

「にしても高すぎない！？ ねえ、これ高すぎない！？ ああー！
」

『そつ、空あ！ 勇者と親衛隊長、無事です！』

『だが、これではレオ閣下の的だぞお！？』

レオンミシエリはニヤリと笑い、斧を空から落ちてくるシンク達に向けて構える。

「貴様と手柄を分けたくなどないが、二人でかからねばどうにもならん」

「へ？」

「協力だ！ さっきのタイミング、今度は外さん！」

「オーライ！」

エクレールは体勢を変えて、

「よし！ 行つて来い！」

と、シンクを蹴った。

「ひでえー！」

『蹴ったあああ！』

レオンミシエリが、落ちてくるシンクに狙いをつけ、斧を振るう。

対するシンクはレオンミシエリに棒を振り下ろす。

斧と棒がぶつかり合う。結果、シンクは押し負け、後ろに飛ばされた。

シンクは空中で体勢を立て直し、地面に着地する。

それとほぼ同じタイミングで、エクレールはレオンミシエリの後ろに着地した。

シンクとエクレールが同時に走り、武器を振るう。レオンミシエリは手に持った盾と斧で防ぐ。しかし……耐え切れず斧と盾は完全に破壊された。ガレット側の総大将の敗北は目前。

シンクとエクレールは一度距離をとってもう一撃いれようとするが、しゃがんで回避された。

二人は素早く向きを変える。

「「はああああ！」」

こればかりはよけることができずレオンミシエリの防具はすべて破壊された。

「ふう〜ん、チビと垂れ耳相手と思うて少々侮ったか。このまま続けてやってもよいがそれでは、ちと両国民へのサービスがすぎてしまうのう」

「レオ閣下、それでは……」

「ん、ワシはここで降参じゃ」

その瞬間二つの光が上空に上がり、花火のように空に広がった。

『まさか……まさかのレオ閣下敗北！ 総大将撃破ボーナス三百五十点が加算されます』

『今回の勝利条件は拠点制圧ですので戦終了とはなりません、このポイント差は致命的、ガレット側の勝利はほぼ無いでしょう』

上空のモニターにマイクを持った閣下が映し出され、撮影班からインタビュ―を受けている。

閣下はすごいな。二人同時に相手をしているのにもかかわらず、手を抜いているようだった。……閣下が本気を出したらどれくらい強いのだろうか。

そんなことをモニターを見ながら考えていると、マイクを持ったエクレールが映し出された。

すると、

——ビリッ

——エクレールの服がパンツを残してすべて破れた。

『勇者、何と自軍騎士に誤爆う！ 防具破壊を超えて服まで破壊してしまいました！』

おおお！ これはいいものが見れた！

こんなこと滅多にないだろうからよく脳裏に焼き付けておこう！
後でシンクに礼を言わないとな！

俺がさっきの映像を目を瞑って記憶していると、ブリオツシュさんが声をかけてきた。

「フロニヤルドの戦はどうでござったか？」

目を開け、ブリオツシュさんを見上げた。

「いい戦いも見れたしとっても面白かったです！ こんな戦なら俺も出てみたいです」

「なら今度の戦に参加してみてはどうでござるか？」

「え？ だけど俺はシンクみたいに勇者として呼ばれたわけでもないのに……」

「戦にはミルヒオーレ姫の許可があれば、誰でも参加できるでござるよ」

「そうなんですか？ でも俺なんかの話を姫様が聞いてくれるかどうか……」

ミルヒオーレ姫……たしかビスコッティの領主……だったかな？

「心配無用でござる。優人殿が戦に参加できるように、拙者が姫様に頼んでみるでござる」

「いいんですか！？ でも……何でそこまでしてくれるんですか？」

「拙者は優人殿に少し興味があつてな、優人殿がどんな戦いをするか見てみたいのでござるよ」

ブリオツシュさんは白い袋から巻物と筆と墨を取り出して、近くにあった平らな岩の上に巻物を広げると、慣れた手つきで見たことのない文字を書き出した。

「ユキカゼ。あれはこの世界の文字か？」

「そうでござるよ。『フロニヤ文字』といってフロニヤルドでは、ほとんどの者が使っているでござる」

あれがこの世界の文字か。

「できたでござる」

ブリオツシュさんは巻物を丸め、立ち上がった。

「ホムラ。仕事を頼みたいでござる」

それを聞いたホムラはセルクルから飛び降り、ブリオツシュさんのところに駆けてきた。

「これを姫様に届けてほしいでござる」

ブリオツシュさんが、ホムラの首に巻いてある赤いスカーフの中に巻物を入れる。

「ワン！」

ホムラはクルリと振り返り走っていった。

ブリオツシュさんはホムラを見送ると、俺を見た。

「戦では紋章砲があると何かと便利でござろう。拙者らは今夜、フイリアンノ城に戻る予定でござるが、それまでの間でいいなら拙者が教えるでござるよ」

「本当ですか！ ぜひお願いします——師匠！」

「師匠？」

「あ、すいません。いけなかったですか？」

「べつにかまわないでござるよ。ときに優人殿は武器を持っていなかったでござるな」

「あつ……戦に出るなら武器がないと困りますよね……」

そうだ俺、武器持っていないんだった……。

「なら拙者のこの刀を貰ってほしいでござる」

師匠は俺が魔物との戦闘で使った刀を渡してきた。

「ありがとうございます、大事にします！」

この刀、重さも長さもちょうどよくて使いやすかったんだよな。

「ところで、紋章砲の練習はどこですか？」

「この近くにいい場所があるでござる。今からそこに向かうでござるよ」

俺達はセルクルに乗り、師匠が知っているいい場所へと向かった。

閣下VS勇者&親衛隊長（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。二度以上行うこともあるかもしれませんが。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待ってます。

今回は三人称が多めです。今後も一人称と三人称が混ざることもあるかもしれませんが。いまいち一人称と三人称の違いがわからないですよね……。もっと勉強しないと。

ダルキアン卿とユツキーが使う『ござる語』（作者命名）が難しいです。口調って意外と難しいです。書いてて何回も、ここはこうでいいのかな？ってなりました。作者だけかな？w

この前DOG DAYS ドラマBOX vol.3がアマゾンから届いたので、聴きました。いやゝよかったです。二期が待ち遠しいですね。あと、vol.3に収録されている「Miracle Colors」がすごく気に入りました。

コミケ行きたかったな……。エクレの抱き枕カバーほしかった……。

明日はGS4の発売日ですね。開闢持つてなかったからすごく助かります。

一月はDT14、オメガ、GS4があるので財布が軽くなりますねw
そうそう、DOG DAYSの設定資料集も買わないといけませんね。

紋章術（前書き）

昨日投稿しようと思っていたんですが、忙しかったので今日にしました。

紋章術

「オンミツ部隊って具体的にどんなことをするんだ？」

前でセルクルを操っているユキカゼに聞く。

「任務のためにビスコッティを離れ、諸国を巡っているのでござるが……すまないでござる……詳しいことは話せないでござる」

「そっか……」

言えないってことは大事な任務なんだろう。任務についてはこれ以上聞くのはやめておくか。そういえば、さっきいろんな国を巡ってるって言ってたよな。もしかしたらアイツのこと何か知ってるかも。

「師匠。一つ聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「かまわないでござるよ」

「ユキカゼも聞いてくれるか？」

「了解でござる」

「勇者を召還する儀式は、ほかの国もできるんですよね？」

師匠は首を縦に振る。

「二年くらい前に色が違うだけで今回の儀式とほとんど同じものを見たことがあるんです。そのとき近くにいた『神崎 光』っていう

名前の女の子が消えたんです」

「神崎……優人殿のご家族でござるか？」

「はい……俺の妹です」

あの日……光は、俺や親父や母さんに何も言わず消えた。

自宅の庭に紋章が描かれて、光はその中へと入っていった。その場面は今も記憶の中に鮮明に残っている。

「いろんな国を巡っている師匠とユキカゼなら、光のこと何か知ってるんじゃないかと思ったんですけど……」

「優人殿の話を聞いた限りでは、光殿は勇者として召還された確率が高そうでござるが……悪いでござるな、何も知らないでござる」

「そうですか……」

「ユキカゼは何か知ってるか？」

「拙者も何も……」

師匠もユキカゼも光のこと知らないか……まあ簡単にわかるわけないよ……。けど、この世界にいるかもしれないってことがわかったからよしとするか。

とりあえず、シンクと合流しないと。光のことは後で考えよう。

「到着でござる。ここなら思いっきり練習できるでござるよ」

「おお……」

ここは空き地のようなところで、大きな岩がいくつかある。それ以外には目立った物は何もなく、果てしなく広い。紋章砲のような技を練習するにはもってこいの場所のようだ。

「さっそく始めるでござるよ。狙いは前方に見える巨岩」

師匠は鞘から刀を抜いた。

「はい！」

俺も鞘から刀を抜く。

「まずは紋章を発動させる」

「えっと……こうですか？」

俺の手の甲に空色の紋章が現れる。

「全身に力を込めて紋章を強化する」

師匠の背後に明るい紫色の紋章が出現した。紋章は大きく鮮やかになる。師匠の紋章に描かれている交差した剣……俺のと似てるような……いかんいかん集中集中。

俺は意識を集中させ、全身に力を込める。

「紋章術の力の源、フロニヤ力を自分の命の力と混ぜ合わせ、輝力に変えて武器から打ち放つ！」

「はぁぁー！」

同時に刀を横薙ぎに振るい、俺は空色、師匠は紫色の閃光を放つ。二色の閃光は、巨岩に命中。爆発音がして煙が上がる。自分の思った方向に撃つのが難しいな。なんとか岩に当たりはしたけれど。……煙が晴れるとそこには岩の残骸が転がっていた。紋章砲ってすごい威力だな。

「すごいでござるよー！ 優人！」

「え？」

振り返ると、ユキカゼが驚きの眼差しで俺を見ていた。

「紋章砲をこんなに早く使えるようになる者はそういないでござるよ」

「そうなのか？」

俺にはどのくらいすごいかわからないが、ユキカゼの驚き方を見る限りすごいことなだろう。

「ただ、狙いやコントロールが甘いゆえ、要練習が必要でござるよ。今の優人の紋章砲は実戦で使うにはやや厳しいでござる」

最後にユキカゼの手厳しい言葉。

「うう……頑張ります……」

シンクが普通に使ってたから俺もいけると思ったのに……。

「紋章砲を使った後は少し疲れるでござろう？」

「そうですね？ 俺は別に疲れてないですよ」

その言葉に師匠は驚きの顔を見せた。

「……それは本当でござるか？」

「はい」

師匠は顎に手を当て、「将来が楽しみでござるな……」と楽しそうに呟いた。

「どうかしたんですか？」

「いや、何でもないでござる」

「それより優人殿。あと二つ紋章術を教えたいのでござるが」

「どんな紋章術なんですか？」

「口で言うより見たほうが早いでござろう」

師匠は近くにある大きくて少々丸みのある岩の前に移動し、目の前の巨岩に向けて刀を構えた。

もしかしてあれを刀で斬るのか？ いったいどうやって……。

師匠の刀の刀身を明るく紫色の光が包み込む。

あの光！ 色は違うけど俺が魔物と戦ったときもあんな光が刀身を覆ったな。あれは紋章術だったのか。

そして跳躍、岩のてっぺん辺りまでくると刀を振り下ろす。

師匠が地面に着地すると、巨岩が真つ二つに分かれた。すごい……あんな大きな岩を刀で斬った。師匠は刀を鞘に収めるとこっちに戻ってきた。

「紋章術って武器を強化することもできるんですね」

「戦では武器同士をぶつけ合うことが多いでござるからな。さっきのように紋章術を使えば、武器を強化できるでござる。優人殿の使っている刀は、少し特殊で頑丈にできているでござるが、一般兵ならともかく騎士級が相手となればさっきの紋章術無しで攻撃を刀で受ければ、数回が限界でござろう」

「なら、この紋章術は特に覚えなないといけないってことですね。なんとなくですけど、師匠を見てたらやり方がわかったからやってみますね」

この紋章術は魔物と戦ったとき、ほとんど無意識とはいえ一度使えてるからきつとできるはずだ。

刀を構える。

まずはフロニヤ力を輝力に変えて………こんなカンジか。

——刀身が空色の光に包み込まれた。

「この紋章術もこんなに早く使えるようになるとは……これなら身体強化の紋章術もすぐに使えるようになるでござろう」

「身体強化？」

俺は紋章術を解き、刀を鞘に収めた。

「お館さま。その紋章術なら拙者、得意でございますよ」

はい、と生徒のように手を挙げるユキカゼ。

「うむ、任せたでござるよ、ユキカゼ」

「優人、拙者が教えてもいいでござるか？」

「ああ、もちろん」

「まずは簡単なやつからいくでござるよ」

ユキカゼはその場でしゃがみ、足元に黄色の紋章を出現させて、真上に高く飛んだ。綺麗に着地すると、今度は俺の周りを走りだした。その速さは俺の目ではまったく追えないくらい速い。

「と、基本的なのはこれくらいでござる」

ユキカゼは俺の目の前で止まる。

「すごいな、ユキカゼ！」

パチパチと賞賛の拍手をユキカゼに送る。

どうやら紋章術はジャンプ力を上げたり、走るスピードを上げたりもできるみたいだ。

紋章術ってほんと便利だな。

「いや、それほどでもないでござる〜」

手を頭の後ろに当てて、にこやかな顔をしている。

「とりあえずやってみるよ」

俺はユキカゼのようにしゃがむと、足元に空色の紋章を出現させる。この紋章術もほとんど無意識だったけど一度使えてるから大丈夫だろう。ジャンプするのは初めてだけど。

脚に力を入れ、跳ぶ。軽くジャンプしたつもりだったんだけど、結構高く飛べるんだな。体勢を立て直し、地面に着地した。

「とても初めてとは思えないでござる」

ユキカゼは驚いたような目つきで俺を見ている。

「ユキカゼ。ちょっとこの辺を走ってくる」

俺はユキカゼに背を向けて、紋章を発動させる。

「走るほうがコントロールが難しいでござるから気をつけるでござるよー」

「わかった。気をつけるよ」

最初は軽めにいくか。俺はその場から駆け出す。

ユキカゼの言う通り、この紋章術はコントロールが難しいな。けど、だんだんわかってきたぞ。そろそろ師匠とユキカゼのところに帰るか。二人がいるところに方向を変える。帰りはさっきよりも速くするか。

俺は速度を上げたが、まずいことになった——止まらない。

調子に乗ってスピード上げるんじゃないかったッ！ 四苦八苦しなから止まるうとする。

ユキカゼと師匠が見えてきた。

あの二人、話し込んで俺に気づいてないぞ！ やばい！ このままだとユキカゼに当たる！

「ユキカゼッ！ 避けるー！」

俺の叫び声にユキカゼが「え？」と言いながらこっちを見た瞬間、俺は石につまづいた。

「うああ！」

そのまま俺はユキカゼに抱きつくようにぶつかり、ユキカゼを押し倒して滑るように地面を進み、止った。

「ぶはあ」

俺はユキカゼの柔らかい双丘で息ができなかったため急いで顔を上げた。

「ユキカゼ、大丈夫か？」

「いたたた……大丈夫でござる……」

見たところ怪我はなさそうだな。
ほっと息をつく。

「そろそろ拙者から下りてほしいのでござるが……」

「あ、悪い」

すぐ離れて、手を差し伸べてユキカゼを立ち上がらせた。

「二人とも無事でござるかー？」

師匠が駆けて来た。

「俺は大丈夫です」

「拙者も問題ないでございます」

「優人殿は『けものだま』になれないゆえ危ないでござるよ」

「反省します……」

ここに来る途中にユキカゼから聞いた話だが、フロニヤルド出身の人は一定以上ダメージを受けると、けものだまという姿に変化して怪我を防ぐことができるらしい。だけど、異世界出身の俺やシンクはけものだまになれない。だから紋章術を使うときや戦では注意が必要なのだ。

「優人、足元に何か落ちてるでござるよ」

「え？ あっ！」

落としてしまったペンダントを拾い上げる。

「危うくなくすところだった……。サンキュー、ユキカゼ」

多分さっきこけたときにポケットから落ちたんだろう。失くさないようにつけておくか。

大事なペンダントだからずっとつけておきたいけど、学校じゃそう

いうのは禁止だからなあ……。

「綺麗な水色でござるなあ……」

ユキカゼが俺のペンダントに目を奪われている。

「ワン！　ワン！」

犬の鳴き声、ホムラだな。

手紙を姫様に届けて帰ってきたんだろう。

ホムラに目を向けると、赤いスカーフの中に巻物が入っていた。

「ホムラよくやったでござるよ」

ユキカゼがホムラの頭を撫でている。ホムラはとても嬉しそうな表情をしている。

ユキカゼは赤いスカーフから巻物を取ると師匠に渡した。

「これは……」

師匠は笑みを浮かべている。

面白いことでも書いてるのかな？

「朗報でござるよ、優人殿」

「????」

「優人殿も戦に出られるでござるよ」

「本当ですか！」

「戦はもう始まっているでござる。急いで向かうでござるよ。今回の戦のルールは現地に向かいながら話すでござる」

まさかこんなに早く戦に参加できるなんて！ いやー楽しみだ！

紋章術（後書き）

更新は毎週、金曜日、土曜日、日曜日、のいずれかに一度、必ず行います。二度以上行うこともあるかもしれませんが。

誤字・脱字、があれば感想で報告してくれると助かります。

『この表現はおかしい』というところも教えていただけると幸いです。

アドバイスは大歓迎です。感想も待ってます。

主人公の優人はあまりチートにはしていません。今の優人の強さはシンクと同じくらい。紋章術はシンクより下手、といったカンジです。優人はこれから色んな経験をして少しずつ強くなっていきます。

次回はミオン砦編です。

冬休みも終わりですね。あっという間だった気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721ba/>

DOG DAYS もう一つの世界

2012年1月9日19時52分発行